

漂流

夜中の一時か二時になつていたと思つ。昨日と同じように宮川は半袖半ズボンの防暑服を着たまま、私はふんどし二丁の裸になり、防暑服を頭に縛りつけて二人とも穴を這い出した。

この頃になると、敵に見つかるとはまずないと大胆になっていた。

波打ち際まで引張り上げておいた樽を『ロキ』ロキあちこち探しまわつたが、どうしても見つからない。しまった！

満ち潮の時にきつと流されてしまつたのだ。迂闊だつたと思つたがあの祭りである。それでもあきらめずに、代わりになりそんなものを探しまわつた。

燃料入りのドラム缶を船から下ろすときに使つた直径約三十センチ、長さ一・五メートルの丸太を見つけた。二人で海へ浮かべてみると大丈夫、われわれがつかまつていても沈まない。樽より重く動きが鈍くなつたが、かゝつて水をかい出す手間もかからない。

わたしが丸太を抱くようにしてつかまり、宮川は背泳で、丸太に結んだひもを引き先へ先へと泳いでくれた。

西フロリダの対岸はすぐ真向かいに見えるのだが、焦つて直線コースを狙えば、海流に流されて岸へたどり着けないかもしれない。また、私が泳げないということもあつて、海流の流れにのつて行けるように、大きな『X』コースをとることにした。

海兵団では水泳不能者を海から突き落としては、溺れる寸前に助け上げ、また突き落とす。これを何度も繰り返して無理やり泳ぎを覚えさせたような話を聞いたこともあつたが、私は工作科ということもあつてか、そんな酷い目にあつたことはなかつた。また、カッター（ボート漕ぎ）練習で、水泳不能者には赤帽をかぶらせたりしたよつたが、そんな経験もしなかつた。

少しでも泳ぎを覚えていれば、これほど苦勞せずすむのにと、夢中で丸太にしがみついていた。

宮川が背泳で丸太を引張るよつに泳いでいたとき、後方に海水を切つてつちへ向かつてくるものがあった。味方の潜水艦のよつだといつ。私も無理な姿勢から振り返つてみた。なるほど、潜望鏡だ！ 白い航跡をたてて、こちらへ向かつてくる。

潜望鏡なら百八十度見えるわけで、われわれの姿も当然とらえているはず、ああ助かったと思つた。

近づいて浮上してくるものと暫く待たなうが、ただどんぱたどちちら近づいてくるばかり。

エンジンの音もなにも聞「えない。

まだわれわれに気が付いていないのか？

手の届く所へきたら、潜望鏡につかまつてやろうと思つた。頭が朦朧としていて眼をしばたきながら見ると、とんでもない、鱈(ふか)の背びれだつたのだ。二人とも驚き、慌てた。

この時とときにひらめいたのが、ラバウルの時の新兵教育で教えられたことだ。鱈の口は下に付いていて、獲物に食いつくときは自分の体を回転させ裏返しにならないと食いつけない。浅瀬では背びれを傷付けるので食いつかないということだつた。

頭に縛りつけてある防曇服のシャツを流し、次

にスポンを流し、鱈の注意をそらして時間をかせぎ、その間に、遠浅のように広がる珊瑚礁へ逃げ込むことだつた。

いま考えると、こんなときに全く唐突だつたが、宮川は私に

「俺のおぶくろは大森の二業地で、昔者の髪結いをしてる」

とはじめて素性をあかし、俺が死んだらおぶくろに知らせてやつてくれと通言めいたことを言つた。

わたしの方も

「練馬の桜井台駅のそばで、桜井は一軒しかないからすぐ分る」

と、いつとどちらか生きて帰れた方が、実家へ知らせる約束をした。

夜光虫が光つて敵に見つかりやすいが、そんなことに気をつかつている場合ではなく、泳げない私も泡をくつて、足を相互にばしやばしやさせた。

